神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Three Farewell Essays 1. A Road to the Church, 2. Francesco, 3. Forgive and Promise

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-03-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 村上, 信一郎, MURAKAMI, Shinichiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1898

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

辞するにあたり、随想３題

村上信一郎

その１　教会への道

神戸市外国語大学の本部棟の大会議室の壁に「教会への道」と題する油絵が飾られている。額縁につけられた真鍮のプレートには K.Kasamatsu と画家の名前が記されている。描かれているのは1995年に起こった阪神大震災前のカトリック六甲教会あたりの景色である。もうすべて変わってしまった。

わたしにイタリア語を教えてくれたのは、この教会にいたイエズス会の神父ピエトロ・ペレッティさんである。まだ大二年生だった。大学の第二語学にはフランス語かドイツ語かロシア語しかなく、わたしはフランス語を専攻していた。それはそれで面白く嫌いではなかった。翻訳なしでは歯がたたないくせに、ランボーやヴェルレーヌやサルトルやカミュを原書で読みたかったからだ。だがイタリアのことに興味を持ちはじめ、イタリア語もやりたくなったので、ペレッティさんの教えを乞うことになった。

まったくのプライベート・レッスンだったので、のちにイタリア政府招聘給費留学生の試験を受けるときに、イタリア語の語学能力証明書の提出を求められたので困ったことを覚えている。じつは当時わたしがいちばん読みたかったのは、イタリア共産党の創始者の一人であるアントニオ・グラムシが書き遺した『獄中ノート』だった。いうまでもなくペレッティ神父はゴリゴリの反共主義者だった。モスクワはイタリア語ではモスカ、それを日本語では何と言いますか。蝿ですね、わはは…。こんな笑うに笑えないジョークにも付き合わざるをえなかった。しかもペレッティさんは旧漢字をもちいた文語訳の聖書で日本語を覚えたので、せっかく日本語で書いて説明してくれたのに、わたしには判読不可能な漢字がたくさんあったことにもしばしば当惑した。

ペレッティさんは、わたしが全共闘運動にのめりこみはじめたことに、うすうす気づいていたにちがいない。なにせ、あのころの長髪はもう隠しようもない、そんな運動にいそしむ若者の象徴だったのだから。でも何もいわずわたしにイタリア語を教えつづけてくれた。Pater Noster と Ave Maria だけは忘れないように、といいながら。わたしも教会の生垣の茂みのなかにヘルメットそっと隠して、ペレッティさんのもとに通いつづけた。

ペレッティさんはイタリアのアルプスの麓にあるピエモンテの農村の出身で、

日本に宣教にやってくるまで海を見たことがないといっていた。2013年４月22日上石神井のイエズス会ロヨラハウスにて帰天。享年92歳。留学後お会いする機会もなくなってしまったが、わたしの生涯の師の一人であった。

その２　フランチェスコ

わたしたちは2013年２月11日の月曜日フィレンツェにいた。２月11日はラテラノ条約調印記念日だった。イタリアに統一国家ができたのは1861年。だがローマ教皇がこれを承認せず国家と教会はその後長く対立しつづけた。この対立に終止符を打ち、国家と教会の間に和解をもたらしたのが、1929年２月11日、ムッソリーニと教皇庁との間に結ばれたラテラノ条約だった。これにより独立した主権国家としてバチカン市国が誕生したのである。

この日は、どの新聞を見ても、辞職したベルルスコーニ首相がその記念式典に招かれるかどうかといった程度の話題しかなかった。ところが、その日、教皇庁では枢機卿会が招集されていた。その席上、教皇ベネディクト16世が突如ラテン語で何かを話しはじめた。ラテン語はバチカン市国の公用語である。だが枢機卿といえども話の内容がすぐに理解できた人はほとんどいない。記者会見になって初めて一人の女性記者が教皇の意図をはっきりと理解しスクープした。ともあろうにこのときベネディクト16世は自ら教皇を辞すると宣言していたのである。1294年に教皇ケレスティヌス５世が生前退位したことでダンテが『神曲』において臆病な教皇と非難したような例はあるにはあった。だが空前絶後の大事件であることだけは間違いなかった。

わたしと妻の万里は、その翌日２月12日にアッシジに行く計画を立てていた。わたしたちは1986年にまだ５歳だった娘の遥を連れてアッシジを訪ねたことがある。わたしはその後も何度か訪ねたことがあったが、万里は久しぶりなのでぜひ訪ねたいと主張した。だが天気予報は豪雪とのこと、フィレンツェの友人たちは口をそろえて何が起こるか分からないので日程をかえたらどうかという。だが万里は頑として譲らず行くと言い張った。

こうしてアッシジの駅に着いた。雪どころか、オーバーもいらないぐらいのぽかぽか陽気である。真冬だったので観光客はほぼ皆無といってよかった。いつもなら巡礼者や観光客であふれかえってごった返しているのに、こんな静かなアッシジを歩くのは初めてだ。困ったのは昼食をとるための店がみんな閉まっていることぐらい。サン・ダミアーノ修道院をはじめフランチェスコゆかりの聖地もすべて心ゆくまでゆったりとした気持ちで訪ねることができた。

フランチェスコ大聖堂のまん前のアルベルゴ・フランチェスコに宿泊した。夜になると部屋の窓からライトアップされた大聖堂が真正面に見えた。そして

朝一番に大聖堂に行ったので門番の修道士もいない。ジョットのフレスコ画を心ゆくまで堪能した。フランチェスコの墓所にじっとたたずむこともできた。まるでわたしたちが来るのを待ってくれていたかのような気さえした。

その翌日の2月13日にはローマに行き、親友のサンドロ・マジステルのお宅で夕食をご馳走になった。サンドロはわたしよりも4歳年上の『エスプレッソ』というイタリアではよく知られた左派系週刊誌のジャーナリスト。バチカン問題の専門家だ。夫婦ともにミラノ近郊の出身で、もうローマ暮らしが長いのに、アクセントや料理の味付けや物腰までもがミラノ風である。

もとはカトリック運動の左派に与していたので『エスプレッソ』のような左派系週刊誌に勤務することになったが、しだいに保守的となり、今では教皇庁の高位聖職者とも深い関係を結び、教皇ベネディクト16世の『説教集』の編集まで委ねられるようになっていた。そんなこともあって、サンドロの家を訪ねたときには、教皇の生前退位について、その日1日で100本以上の執筆依頼や電話取材があったほどの猛烈な忙しさだった。でも妻のアンナは、そんなことはまるで意に介さず、いつもどおり心づくしのミラノ風家庭料理をわたしたちのために用意してくれたのである。

さらにその翌日の2月14日、もう一人別の友人から招待を受けていた。

ローマ大学の現代史の教授シモーナ・コラリーツィさんである。彼女の家はローマのカンポ・デイ・フィオーリ広場にあった。野菜や肉や花などの市がたつ下町の広場で、1600年に異端の嫌疑を受けて火刑となった哲学者ジョルダーノ・ブルーノの銅像があったことから、反体制的な左翼の労働者や学生たちが好んで寄り集まってくる場所でもあった。この広場に面する建物の2階が彼女のアパルタメントで、広いリビングにロフトまでしつらえた優雅な内装の立派なお宅だった。この広場の雰囲気にはそぐわないので少し意外な気がした。

シモーナさんは今では歴史上の人物となったともいえる著名な歴史家レンツォ・デ・フェリーチェ教授の愛弟子の一人だった。わたしも著書の邦訳がきっかけで教授の知遇を得ていた。この日のご招待はじつはサプライズ・パーティであった。シモーナさんはわたしたちには内緒で、わざわざこの日のためにシェフまで雇い、エレーナ・アガ・ロッシというデ・フェリーチェのもう一人のお弟子さんや、デ・フェリーチェとは立場を異にするグラムシ研究所の所長も加わった盛大なパーティを準備してくれたのである。

シモーナさんはわたしよりも4歳年上で学生時代はもう今はない社会党の活動家だった。社会党を牛耳り政治腐敗によって崩壊にまで導いたベッティーノ・クラクシに対抗した左派の指導者クラウディオ・シニョレッリの同志でもあった。現在は別のイタリア系アメリカ人と暮らし、半年ごとにローマとニューヨー

クを往復する生活を送っている。余談だがデ・フェリーチェには何人か女性のお弟子さんがいたが、みんな美人でお金持ちのお嬢さまだった。シモーナさんもそうだけれどエレーナさんもそうだった。エレーナさんはロシア系カナダ人の歴史家と結婚し、ソ連崩壊後公開された外交文書を用いた『トリアッティとスターリン』という優れた共著を公にしていた。

このパーティでいちばん話題となったのは教皇ベネディクト16世の生前退位だった。次はどんな人物に教皇になってほしいのか。アメリカで流行っているジョークをたまたまこの国から帰国したばかりの女性教授が紹介した。

いちばんいいのは女性だ。それがだめならホモセクシャル。それもだめならば黒人かユダヤ人がいい。このようにシモーナさんのサロンには、いまだにフェミニズムや同性愛や民事連帯契約に理解を示そうとはしないカトリック教会には著しく批判的であり、非宗教的で世俗的な、ある意味では反教権主義的とさえいえる雰囲気が濃厚に漂っていた。異端審問で火刑となったジョルダーノ・ブルーノの銅像が立つ広場にふさわしい話題だということもできた。いずれにせよサンドロの家では考えられないような会話だった。

ベネディクト16世が 2 月28日に正式に退位したことを受けて 3 月12日からシスティーナ礼拝堂において教皇選挙（コンクラーベ）が教皇選挙権をもつ80歳未満の枢機卿115人により行われた。その翌日の 3 月13日、わずか 5 回目の投票でアルゼンチン出身のブエノスアイレス大司教ホルヘ・マリオ・ベルゴーリオ枢機卿が 3 分の 2 を越える得票をえて第266代の教皇に選出された。ベルゴーリオは1936年にブエノスアイレスに生まれたが、両親ともにイタリアからの移民で、父親は鉄道員だった。ヨーロッパ以外の出身者が教皇となるのはシリア出身のグレゴリウス 3 世以来1272年ぶりのことである。また初めてイエズス会出身の教皇が誕生した。そして教会史上初めてフランチェスコを名乗る教皇となった。教皇フランチェスコは最初の記者会見で、わたしは貧しい人々による貧しい人々のための教会となることを願ってやまないと述べた。バチカン宮殿ではなく今も枢機卿のときの宿舎だったサンタ・マルタの家に暮らしている。まことにささやかなことだが、わたしたちにとって、アッシジへの小さな旅は、まるで奇跡にでも出会ったかのような不思議な体験となったのである。

わが主よ、あなたが讃えられますように、あなたのすべての被造物と共に、
とりわけ兄弟なる太陽とともに。
太陽は昼であり、あなたは太陽によって私たちを照らして下さいます。
太陽は美しく、大いなる輝きよって光り、
いと高き方よ、あなたの意味を告げてくれます。（『被造物の讃歌』より）

その3　許すことと 約束すること

ジャック・ドロールは、ミッテラン大統領の下で財務大臣を務めたのち、1985年から1995年まで10年にわたり欧州委員会委員長として欧州統合を強力に推進したフランスの政治家である。欧州統合史ではジャン・モネにも匹敵する重要な役割を果たした人物として記憶に残ることになるであろう。だがドロールが実現に尽力した欧州経済通貨統合はいま重大な危機のなかにある。欧州統合に対する懐疑派の嵐が吹き荒れている。

ドロールは2010年3月15日にオランダのナイメーヘン和約記念賞を受賞した。ドロールは受賞講演で次のように述べている。

「戦後のヨーロッパ人は悲劇の記憶や生活の辛さや不信にさいなまれていました。ところが今ではあらためて和解し、お互いに承認しあい、寛容を旨として生きています。そのことを思うにつけユダヤ人の政治哲学者ハンナ・アーレントがいった次の二つの言葉が脳裏に浮かんできます。それは許すことと約束することです。許すことは忘れることではありませんでした。また約束するというのは、悲劇の後に生まれてくる若い世代の人々が大歓迎を受けながら大手をふって人類共同体のなかに受け入られるということを約束することでした。塗炭の苦しみを味わったオランダの人々にとって、またおそらく他のヨーロッパ人々にとっても、ヨーロッパ統合という根本的に新しい歴史の段階に船出することは容易なことではなかったのです」。

許すことと約束することは、ハンナ・アーレントが1958年に公にした『人間の条件』から引用された言葉である。彼女は本書において人間の生活を労働、仕事、活動の三つにわけ、活動（action）こそは物や事柄の介入なしに直接人と人との間で行われる唯一のものであり、複数性という人間の条件に対応する限りは、公的な領域としての政治の本質をなすものだとする。また活動は出生という人間の条件と最も密接な関係をもつとした。新たに生まれてくる者は新しいことを始める潜在能力を宿しているからだ。

それでは許すことがなぜ大事なのか。それは人間の活動が不可逆性を条件づけられているからだ。過去は取り消すこともやり直すこともできない。それを越えて進んでいくには許すことしかない。それでは約束することがなぜ大事なのか。それは人間の活動が不可予言性を条件づけられているからだ。人間は自分自身を完全に信じることはできず、その生はつねに不確実性に満ちている。だから未来を約束する力がなければ生きていけない。

アーレントの学位論文は『アウグスティヌスにおける愛の概念』であった。アウグスティヌスは「始まりが存在せんがために人間は創られた」と『神の国』で言っている。一人ひとりの人間がまさしく始まりなのである、と。